九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

古代語法存疑(その二)：久語法について

福田，良輔

https://doi.org/10.15017/2332895

出版情報：文學研究. 50, pp.31-41, 1954-12-25. 九州文学会
バージョン：
権利関係：

古代語法存疑（その二）

――久語法について――

福田良輔

一

前稿の終りで、奈良時代の形容詞における久語法について觸れたので、久語法一般について考察を試みよう。いふまでもなく久語法は、又江戸時代から加行延言とも呼ばれてゐる語法形式であつて、奈良時代において最もその盛行を見た語法形式である。外形上の音形式では、活用語の活用形に「く」又は「らく」が付いた形になつてゐる。

動詞	終詞形	連体形	
四段	nageku（歎）	nageku	nagekaku
上二段	sugu（過）	suguru	suguraku
下二段	omofoyu（思）	omofoyuru	omofoyuraku
上一段	miru（見）	miru	miraku
加変	ku（来）	kuru	kuraku
佐変	su（為）	suru	suraku
良変	ari（有）	aru	araku
助・動詞			
*四段	nu（否定）	nu	naku（ni）
	mu（推量）	mu	maku
下二段	tu（存在態）	turu	turaku
	simu（使役）	simuru	simurak
奈変	nu（完了）	nuru	muraku
良変	ri（存在態）	ru	raku
	keri	keru	keraku
	nari	naru	naraku
	bekari	bekaru	bekaraku
不規則	ki（過去）	si	siku
形容詞			
	fasi（愛）	fasiki * fasike	fasikeku
	sigesi（繁）	sigeki * sigeke	segekeku

（「國語國文」第11巻9号・岡田希雄氏「久語法の接続について（上）」参照）

右の表によれば、外形的音形式上からは、活用語の活用形に「く」又は「らく」が付いたものと云ふことができる。即ち、「く」

は四・ラ変の未然形及び形容詞の未然形の古形に付き、不規則の助動詞「き」には連体形に付き、「らく」の方は、上二段・下二段・カ変・サ変・ナ変の終止形、上一段の未然形に付いてゐる。

単に外形的形式上からばかりでなく、音形式を離れては文法は考へられないし、また文法論は共時論に属する。われわれが文章を書いたり、話をする場合、たとへ国語学者や言語学者であるにせよ、語法の成立過程まで考へながら、書いたり話したりする人は無い。したがつて、奈良時代のひとびとが久語法を実践する場合、共時的にひたすら音形式に基づいて、実践したことはいふまでもない。したがつて、奈良時代の久語法としては、前に述べたやうに、「く」又は「らく」が活用形の種類の相違に基づき、それぞれ一定の活用形（未然・終止・連体）に付いたものと説くのが妥当である。

しかしながら、久語法の成立過程とその語法論とはおのづから別個の問題である。久語法に関する従来の諸説の中には、往々この両者を区別しないでゐるために、論述に混乱を生じ、誤つた結論に導かれてゐるものがある。しかして、従来の久語法に関する諸説の主要課題は、専ら久語法の成立過程にあると云ふことができる。本稿においては、奈良時代の久語法が「く」及び「らく」の音形式によつて、活用語の活用形に接続するやうになつた過程について考察を加へたいと思ふ。

二

結論を云へば、活用語の連体形に「く」が付いた形が、古代日本語における音節結合や母音交替等の習性に基づいて生じた音形式の変化であると云ふことになる。

加行延言、即ち久語法の成立に関する従来の諸説中、その事例及び考察において最も詳細を尽してゐるのは、岡田希雄氏の「久語法の接続に就いて」（國語・國文、第十一巻第九・十両号所載）であらうか。その中には、江戸時代から昭和十五年頃までの重な諸説が紹介批判されてゐるみならず、久語法の成立に関する考察において、多くの示唆が提出されてをり、拙稿を草するに臨み少からずその恩恵に浴したのである。

奈良時代人の言語意識中には、接尾語「く」及び「らく」は、おのおの一語として意識されてゐたであらう。本論文においては、誤解を避け論述の正確を期するため、「山高み」「子ら」の「み」「ら」等の如く、他の語に付いたものを接尾語と称し、「秋づく」「うるはしみ」等の「づく」「み」の如く、一語の語構成の要素となつてゐるものは、接尾辞と称して区別することにする。即ち、「く」「らく」の成立過程がどのやうなものであるにせよ、奈良時代人の脳中には、それぞれ一個の接尾語として意識されてゐたと思はれる。

泥斯久袁斯叙母宇流波志美意母布（ネ○ヲシソモウルハシミオモフ）　古事記応神記
泥辞区塢之叙（ネ○ヲ〔ジ〕ソ）　書紀　第十巻

3577 曾我比爾宿思久伊麻之久夜思母（ソガヒニネ○イマシクヤシモ）　万葉集　巻十四

754 玉（タマヒロヒ）拾之久（○）常不所忘（ツネワウスエズ）　万葉集　巻四

1577 来之久（コ○）毛知久相流君可聞（モシルクアヘルキミカモ）　万葉集　巻八

天皇乃詔之久（スメラミコトノリタマヒ○之○）（続紀一四詔）　朕聞告之久（ワレニノリタマヒ○之○）

然之乱奏之久（シカシガマヲシ○之○）（続紀二十八詔）

（続紀二十七詔）

朕我天乃御門帝皇我御命以天勅之久（続紀四十五詔）

等の例やその他の例において、過去の助動詞「き」の連体形「し」に「く」が付いてゐることは、少くともこの場合の「く」は、接尾語であることを示してゐると見るのが至当である。かりに「らく」「あく」などの接尾語があつたとしても――事実はさうでないことは後に述べる――、「らく」「あく」などの接尾語の構成要素から派生して、後に原語と同じ機能の独立した接尾語となつたとは思はれない。連体形「し」に付く「く」の用例はすべて例外とすれば問題は無いが、例外を認めるには例外が生じた理由を説くべきであり、従来例外といはれてゐたものの中に事象の本質が存在してゐたことをしばしば経験したわれわれは、連体形「し」に付く「く」の用法の中に、却つてこの事象の本質が秘んでゐるのはないかと疑はざるを得ないのである。

形容詞の場合は前稿で一応説いたので、今は省略することにして、動詞型の活用語においては、四段、助動詞「き」以外の活用形の連体形の語尾は、いづれも「る」(ru)をとつてゐる。もつとも、ラ行四段及び上一段の終止形と連体形とは同形で語尾が「る」であり、ラ変は終止形の語尾の母音 i に u が交替したもので、「る」が現れてゐる他の活用形の連体形の語尾「る」とは成立過程を異にしてゐるが、連体形の活用語尾に「る」が現れてゐることは同じである。したがつて、連体形の語尾が「る」で終はるものが「らく」となり、「る」で終はらないものに「く」が付いてゐる。

しかして、「く」に体言的接尾語の機能があることは、連体形に付くことから略推量されるが、なほこれまで多くの人によつて試みられた「く」の語源・意味・語法等に関する諸考察によつてすでに明らかにされてをり、更めて説くまでもない。したがつて「らく」の「ら」に連体形的機能があることを一応予想することができる。また、「く」が連体形の語尾に「る」が現れる活用語に付くのに対し、「らく」が連体形の語尾に「る」が現れない活用語に付くといふ事実は、「く」の機能を考慮に入れると「らく」の「ら」には活用語尾の連体形の機能が寓されてゐるものと思はれる。だとすると、「らく」は、連体形活用語尾として現れた「る」に「く」が付くことによつて惹起された音韻変化の結果であると見ることができる。

三

共時論的に、奈良時代の文法意識からいへば、すでに述べたやうに、動詞型の活用語では、「く」は四段・ラ変の未然形と助動詞「き」の連体形「し」に付き、「らく」は上二段・下二段・カ変・サ変・ナ変の終止形、上一段の未然形に付くといふ意識が脳裡に成立してゐて、同じ機能を有する別個の接尾語として「く」も「らく」意識され運用されてゐたものと思はれる。しかしながら、前述の如く、「く」「らく」は、活用形式の相異によつて接続を異にし、しかも「く」「らく」共に異なる二つの活用形に接続する如き不統一は、成立過程において生じたのであらう。語法は本質的に統一性を求めることから考へれば、その発生の当初においては、特定の一つの接尾語があらゆる活用語の特定の活用形に統一的に付いたものと見るのが自然である。発生の当初から全く同じ機能を有する「く」「らく」が共存してゐたと考へること

も、言語記号としての語の性質上、無理があらう。

このやうに考へると、奈良時代の「く」「らく」は、本来一元的なものが、音韻的に、語法的に、又はそのいづれかにおいて変化して、二つの接尾語として現れたものと思はれる。

ここにおいて、「く」「らく」の二つの接尾語には、共通な要素が含まれてゐることが想定される。音形式の上では、「く」と「らく」を構成する「く」とは同じである。しかし、音形式が同じであることは、必ずしも意味や機能が同じであることを意味しない。したがつて、「らく」の成立過程を考察し、「ら」及び「く」の本来の性質を明らかにすることが必要である。「らく」の「ら」に活用語尾の連形的機能が寓されてゐることが予想されることは、すでに述べたところであるが、この予想に基づいて、更に「ら」の本来の性質を正確に把握すると共に、「らく」といふ音形式をとり、奈良時代「く」と共に全く同じ機能の一つの接尾語として共時的に意識されるに至つた過程を考察したい。

それには、先づ本稿の論述上必要な限りにおいて、「らく」特にその「ら」についての従来の諸説中重なものに言及し批判してわたくしなりの考へを述べることとし、諸説の詳細な紹介は、紙面を節約するために、前記の岡田希雄の好論文に譲ることにしたい。

「く」「らく」についてはじめて科学的考察を試みた試みた論文は、明治三十三年二月に創刊された「言語学雑誌」第一巻第一号に掲載された岡倉由三郎氏の『語尾のくに就いて』であらう。岡倉氏は論文中に従来の延言説の不合理性を批判し、次の如き傾聴すべき説をいち早く述べてをられる。(a)すべての活用語の連体形の語尾に名詞形を作るための語尾（接尾語）「く」が添はつてできたものであること、(b)ウ列母音で終はる連体形は、「く」にウ音があるためウ音の重複を避けて連体形のウ音がア音に転じたもので、「る」で終はる連体形に付いた場合「らく」となるのも同じ現象であること、(c)「く」は用言を名詞化するが純然たる名詞ではなく、英文法の動作状名詞（gerund）の類であり、「こと」を意味する朝鮮語の kot と同語源から出てゐるらしく事を意味する語尾（接尾語）と解されたこと、(b)現在においてさへ「思ほへりしくし」「玉ひりひしく」等の如く、助動詞「き」の連体形「し」に「く」が付く用法を唯一の例外と認める有力な説があるものを例外とせず、一つの例外も認められなかつたこと。

以上の如き岡倉氏の説は、論証上の不備があるにしても、その要旨においては、「く」「らく」の成立に関する従来の諸説中、五十余年後の今日においても、なほ科学的に正しい卓見であるといふことができよう。殊に(a)及び(b)は久語法考察の根底をなすものであつて、この説を考慮しないで新説を出すことは無意味であらう。筆者は岡倉氏の説の要旨に賛意を表すると共に、「く」「らく」に関する従来の諸説を検討しつつ、(a)・(b)の説を今少しく具体的に考察して実証したいと思ふ。

岡倉氏の説に反対された岡沢鉦次郎氏は、久語法の「く」を名詞的なものではなく、形容詞の「く」と全く同一のものと見られ、したがつて「く」「らく」の用法には形容詞の副詞形及び形容詞の連用形の仮体言（名詞形）と同じ二つの用法があると述べてをられる（「國学院雑誌」明治三十三年六月九両月号所載「岡倉氏の語学上の二論文を読みて所見を述ぶ」）。岡沢

氏の説が妥当を欠くことは今更いふまでもない。久語法の「く」と形容詞の「く」とは明らかにその機能を異にしてゐる。しかしながら、語源的には同語から出たものではないかと思はれるのである。

金沢庄三郎博士は、「く」は朝鮮語の ki·köi·khöi と語源を同じくし、久語法を形容詞の連用形と同じものと見てをられるが（日本文法新論」参照）形容詞の連用形と同視せられることは、山田孝雄博士も「奈良朝文法史」の中で指摘された如く甚だしい誤解である。山田博士は、「く」「らく」の接続関係の成立過程については深く考察されなかつたやうである。ただ山田博士が『「く」を以て場所を示すものとし、慣用の久しきにつれて種々の意義用法を呈するに至れるものと』見られたのは、いかがなものであらう。「く」の機能は、「く」が付いた上の用言又は動詞に助動詞が付いたものを対象化して意識したことを表はすことにあるので、そのため、前後の文意によつて、場所を示すやうに解せられる用例もあるのである。だからといつて、「く」が本来場所を示すものであつたとはいへない。それはむしろ逆であつて、「く」の本質的機能から生じた一つの現象であると考へられる。

安藤正次先生は、四段・ラ変の活用語には「く」が未然形に付き、四段・ラ変以外の活用語には「らく」が終止形に付いたもので、上一段の「見らく」は例外のやうに見られるが、上一段の動詞には終止形をうける助動詞に連用形からつづく「見らむ」「見らめ」「見べし」「見とも」「煮らしも」（以上、万葉集）、「似べき」（土佐日記）の如き傍例があるから、例外ではないとされ、ただ助動詞「き」の連体形「し」に「く」が付くものだけを例外とされてゐる（佐佐木博士還暦記念会編「日本文学論纂」及び「古典と古語」所収）。極めて平面的形式的考察ではあるが、奈良時代の語法意識としては一応妥当である。しかし、「らく」の「ら」が語源的には「らむ」「らし」の「ら」と同系に属し、本来は「有」の語から出たもので存在の意義を添加する性質があるとされ、「らく」「らむ」「らし」は本来「ら」にそれぞれ「く」「む」「し」が付いてできたものと解されたのは妥当であるが、「ら」を本来的に未然形と見られ、「らく」が動詞・助動詞の終止形をうける「らむ」「らし」と同類であることは、「つらく」「ぬらく」「が「つ」「ぬ」と「らく」とに分解れさるべきものであることを証すると説かれたのは、成立論の上では再考すべき余地があると思ふ。更に「く」が用言の未然形をうけるのを原則とし、次いで「らく」が終止形を受ける用法が生じ、一方「らく」が生じたものと見ておいでになるが、賛成致しかねるのである。

佐伯梅友氏は、

天ざかる夷のやつこに天人（あめびと）しかく古非須良波（コヒスラバ）生けるしるしあり（万葉巻十八・四〇八二）

思へこそ年の八歳を、きりかみのよち子をすぎ、橘の末枝（ほつえ）を須具里（スグリ）、この川の下にも長く汝が心待て（万葉巻十三・三三〇九）

を事例として、「恋ひすら」はサ変「恋ひす」の一種の未然形、「過ぐり」は上一段「過ぐ」の一種の連用形と見られ、

(a)	せ	し	す	
(b)	すら	すり	する	すれ

(a) 過ぎ　過ぐ
(b) 過ぐら　過ぐり　過ぐる　過ぐれ

の如く、本来のa系と第二次的語尾をとつたb系とが混合して、サ変や二段活用などが出て来たのであるが、「らく」の「ら」はこの古い未然形の語尾の名残ではないかと考へられたが、なほ疑問を残してをられる（「奈良時代の「國語」参照）。即ち、「く」は未然形に付いたものと見られてゐるが、助動詞「き」の連体形「し」に「く」が付く用法については触れてをられない。やはり例外と見られたのであらうか。

最後にこの頃強力に主張されてゐる説は、活用語の連体形に「こと」を意味するakuといふ形式名詞が付いて、動詞・助動詞の場合は、連体形の語尾のuとakuのaとの二母音が連続するので、前の狭母音のuが脱落して生じた現象であり、形容詞の場合は、その連体形の語尾のiとakuのaとの二母音が連続することによと、i＋aが音韻変化を生じてeとなつた現象と見る説である。ただし、この説も助動詞「き」の連体形「し」にakuが付いく場合、i＋aがeとならないで、「しく」とあつて母音が連続しても音韻に変化が生じないのを例外としなくてはならないところに、この説の弱点の一つがある。この説は、大野晋氏の論文「日本語の動詞の活用形「日本語の動詞の活用形の起源について」（「國語と國文学」昭和二八年六月号所載）の二節の註五によれば、金田一京助博士が昭和十七年に東京大学における講義中に述べられたとのことであるが、昭和十六年三月二十一日に脱稿された前記の岡田希雄氏「久語法の接続に就いて（上）」の中に見えてをり、金田一博士の創見とも思はれるが、また前後して同じ考へを抱いてゐた人が他にあつたとも考へられる。筆者は未だその辺の事情を明らかにしてゐないことを遺憾とする。

「あく（aku）」は、合理的にうまく処理できる説ではあるが、岡倉由三郎氏以外のすべての説が例外とする助動詞「き」の連体形「し」に「くが」付く場合を、やはり例外としなくてはならないところに、他の例外許容者の多くがさうであつた如く、その例外が何故生じたかを説明してゐないところに一つの欠陥がある。また、他のいかなる語とも全然関係づけられない「あく」といふ形式名詞の存在を認めなくてはならないところに、大きな疑問が残つてゐる。

以上は、久語法に関する重な説を管見したに過ぎないが、岡倉由三郎氏以外は、決まつて助動詞「き」の連体形「し」に付く「く」を例外とされてゐるところに再考の余地があるやうに思はれる。そして、今日まで岡田希雄氏以外には岡倉氏の説を顧みる人がないことに物足りなさを感ずるのである。筆者は岡倉氏の説の実証的面において欠くるところを幾分なりとも補つて、氏の説がその要旨において正しいことを明らかにしたいと思ふ。岡倉氏の説の最も主要な点は、(a)「く」はすべての活用語の連体形に例外なく付いて名詞形を作つてゐる、(b)ウ列音では終はる連体形に「く」が付く場合、ウ音の重複を避けて連体形のウ音がア音に転じたもので、したがつて「る」で終はる連体形に付いた場合は当然「らく」となる、の二事項である。しかして、(b)の事項が実証的に論証されなくては(a)の事項も成立しない。

四

さて、古代国語において、活用語、主として用言に助動詞・接尾語が付く場合と、用言や名詞に接尾辞が付いて新な派生語を造る場合における原語の末尾母音の変化現象を考察してみよう。後の場合については、有坂秀世博士の精緻を極めた論文「国語にあらはれる一種の母音交替について」があるので、恩借することとする。有坂博士によれば、接尾辞「す」「る」「し」が動詞に付いて新に派生語の用言を造る場合、「す」「る」の直前にあらはれる音は、

「す」が付いて動詞を造る場合

		ア列	イ列	ウ列	オ列	計
A	四段	10			2	12
B	下二段	11	1			12
C	四段下二段両用	3			1	4
D	上二段			2	5	7
E	上一段		2			2

「る」が付いて動詞を造る場合

		ア列	イ列	ウ列	オ列	計
A	四段	5	1	1	2	9
B	下二段	9	1			10
C	四段下二段両用	6			2	8
D	上二段			2	1	3
E	下二段上二段(?)両用				1	1
F	活用未詳	1				1

「し」が付いて形容詞を造る場合

		ア列	イ列	ウ列	オ列	計
A	四段	2			4	6
B	下二段	5				5
C	上二段	1	1	2	2	6

以上、動詞に接尾語が付いて新に派生語の用言を造る場合、接尾辞の直前に現れる音は、ア列音が最も多く、動詞の場合には殊にその傾向が強い。したがつて、接尾語「く」が付く場合、直前の音にア列音が現れてゐるのも接尾辞「す」「る」が付いて派生語を造る場合と同じく、古代国語における音節結合上の習性に牽引されたことが一つの契機となつたと考へられる。接尾辞が付く場合、その直前にア列音が現れる傾向は奈良時代に至つて一層強く作用するやうになつたと思はれる。この事は有坂秀世博士が述べてをられることにも徴される。有坂博士は、上代国語に存在する音節結合には、

第一則　甲類のオ列音と乙類のオ列音とは、同一結合単位内に共存することが無い。

第二則　ウ列言と乙類のオ列音とは、同一結合単位内に共存することが少い。就中ウ列音とオ列音とから成る二音節の結合単位に於て、そのオ列音は乙類のものではあり得ない。

第三則　ア列音と乙類のオ列音とは、同結合単位内に共存することが少い。

の三つの法則が存在することを発見された。第三則に基づいて、コヤル（臥）、トバス（飛）、トマル（留）等のコ・トは乙類であるから、ヤ・バ・マ等のア列音とは同一結会単位内に共存するこ

とが難しいのにかかはらず共存してゐるのは、接尾辞「す」「る」の前にア列音の来ることが最も多い故、他の語の場合からの類推で新に造られた形かも知れないと述べてをられる（「古代日本語における音節結合の法則」「國語音韻史の研究」一〇八頁）。換言すれば、「す」「る」が付いて派生語を造る場合、「す」「る」の直前に現れる音は、音節結合の法則までも無視してア列音をとる時代があつたといふことである。

また、有坂博士は助動詞「す」「ふ」「ゆ」等が動詞の活用語尾に付く場合、奈良時代においては活用語尾がア列音をとることが圧倒的に優勢であつて、ア列音をあらはす諸例の中に音節結合の法則に合致しないものがあるのは、ア列音をとることが優勢だつたために、ア列音をとる他の形から類推されて新に造られたものが多いと推定されてゐる。そしてキコス（聞）とキカス、オモホユ（思）とオモハユのやうに両形があるのは、ォ列音の前者が古形で、ア列音の後者は、ア列音をとる接続が支配的になつて来たので、類推により生じた新しい形であらうと述べてをられる。この推定は正しいと考へられる。はじめのうちは、原動詞の語幹を構成する音の母音の性質や活用形式の相異等によつて、接尾辞や助動詞の直前の音には、ア列音以外のォ列音・ウ列音・イ列音等も現れたものの如く、それがア列音をとることが次第に優勢になり、遂に支配的勢力を得るに至つて、音節結合の法則までも無視するやうになつたものと考へられる。

五

接尾語「く」が付く場合、その直前の音がア列音をとるのは、古代国講の音節結合上の習性に牽引されたものであることは、すでに述べた。しかしながら、接尾語「す」「る」、助動詞「す」「ふ」「ゆ」の場合においては、すでに見たやうに、ア列音が現れることが優勢であつても、ア列音以外のォ列音・ウ列音・イ列音が現れる場合も相当あつたのである。しかるに、「く」が動詞や助動詞活用の助動詞に付く場合は、例外なくア列音をとるのである。その一つの理由として考られることは、活用形の語尾に「く」が付く用法は、上代でも比較的新しい時代に発生した用法で、接尾辞や助動詞が付く場合に、接続上の一つの音形式としてア列音をとる形式が支配的勢力を振ふやうになつた時代に発生した用法ではないかと思はれるのである。接尾辞「す」「る」などよりは後に発生した用法ではないかと思はれる。

更に、「く」と「らく」との関係は、助動詞「ゆ」と「らゆ」、「る」と「らる」、「す」と「さす」との関係と略同じ関係に立つものと考へられる。「く」「ゆ」「る」「す」はいづれも四段ナ変・ラ変に、「らく」「らゆ」「らる」「さす」は語によつて多少の出入はあつても、大体四段・ナ変・ラ変以外の動詞に付く点で同じ関係に立つてゐる。したがつて、「らく」の「ら」、「らゆ」の「ら」、「らる」の「ら」、「さす」の「さ」等は、語構成上は同じ構成関係に立つものと見てよい。しかして、「らく」の「ら」は、動詞及び動詞型活用形を有する助動詞の連体形のuが音韻変化したのであることはすでに述べた。なほ、附言すれば、「く」は形式体言であり、「く」は助動詞「き」の連体形「し」に付き、連体形の語尾が「る」で終はる活用語に「らく」付いてゐることにより、「らく」の「ら」は連体形の活用語尾のuが変化したものであることは明らかである。したがつて、「らゆ」「ら

る」「さす」等の「ら」「さ」も活用語尾と思はれる。「ゆ」と同じ機能の「らゆ」があり、「る」と同じ機能の「らる」があり、「す」と同じ機能の「さす」があることも、これらの「ら」「さ」が本来は活用語尾であつて、本来助動詞であつた「ゆ」「る」「す」が活用語尾に付いてできたものと考へるべきである。しかして、「らく」の場合からも類推される如く、これらの「ら」「さ」も恐らく未然形の活用語尾の活用語尾ではなかつたらうと思はれる。それはとも角、「らく」の「ら」が活用語尾であることは確実と思はれる。したがつて、「らく」は語構成の上から見て、「ら」と「く」とに分けるべきで、この事は、「き」の連体形「し」に「く」が付くことが何よりも動かし難い証拠である。だとすると、「あく（aku）」といふ形式体言（名詞）が存在してゐたといふ説に対する疑問についてはすでに述べたが、更に一層「あく（aku）」の存在が危まれてくる。

五

成立論的には、「らく」の「ら」が活用語尾であり、決して「ら」の母音aが下の「く」と共に語構成上同一単位を構成してゐるものでないことは、古代日本語における母音交替の現象に、有坂秀世博士によつて発見された次のやうな法則が存在してゐることからも、論証されるのである。即ち、(1)エ列――ア列、(2)イ列――ウ列、(3)イ列――オ列の三種の母音交替は、名詞的語根にも動詞的語根にも等しく現れ、両者における交替の条件に共通点が見られる。

名詞的語根の場合には

(a) その語根が単語の末尾にあらはれる場合には、エ列又はイ列に終る形が用ゐられる。例へば、サケ（酒）　ツキ（月）　キ（木）

(b) ア列ウ列オ列に終る形は、必ずその後に他の語根がついて一つの熟語を成す時にのみ用ゐられる。例へば、サカヅキ（酒杯）　ツクヨ（月夜）　コタチ（木立）

動詞的語根の場合には、

(a) その語根が（連用形として）単語の末尾にあらはれる場合には、エ列又はイ列に終る形が用ゐられる。例へば、アケ（明）　ツキ（尽）　オキ（起）

(b) ア列ウ列オ列に終る形は、必ずその後に接尾辞がついて一つの派生語を作る時にのみ用ゐられる。例へば、アカス（明）　ツクス（尽）　オコス（起）

即ち、名詞的語根と動詞的語根との場合の共通点を求めれば、

(a) エ列イ列に終る形はそれが単語の末尾に立つ場合もに用ゐられ得るものであり、

(b) ア列ウ列オ列に終る形は、そのあとに何か他の要素がついて一語を作る場合のみ用ゐられるものである。

（以上、有坂博士「國語音韻史の研究」四八・九頁参照）

このやうな母音交替の法則が久語法の成立の場合も作用してゐると考へられる。動詞型活用語に接尾語「く」が付く場合、助動詞「き」の連体形「し」に付く場合の外は、「く」の直前の母音がいづれもaとなつてゐるのは、前記の法則(b)が現れたものとして次のやうに考へることができる。「らく」の形が現れるのは動詞型活用形の連体形が「る」で終はつてゐる語である。さうしてこれらの連体形を動詞的語根（語幹）の位置に立たせて、それ

に「く」を付けることにより、法則(b)が作用して、語尾の「る」が「ら」となつたものと考へることができる。終止形と連体形とが同形のものでは、「く」が連体形に付いたか終止形に付いたものかが問題になるが、助動詞「き」や連体形が「る」で終はる語の場合から考へて、やはり連体形を動詞的語根（語幹）の位置に立たせて、「く」が付くことにより、法則(b)が作用して母音uがaに交替したものと考へられる。念のため事例を示せば、

動詞		
上二段（連体）	過ぐる	suguru+ku>sugu**ra**ku
下二段（〃）	恐るる	ösöruru+ku>ösöru**ra**ku
上一段（〃）	見る	miru+ku>mi**ra**ku
カ 変（〃）	来る	kuru+ku>ku**ra**ku
サ 変（〃）	為る	suru+ku>su**ra**ku
ナ 変（〃）	寝る	nuru+ku>nu**ra**ku
ラ 変（〃）	有る	aru+ku>a**ra**ku
四 段（〃）	聞く	kiku+ku>ki**ka**ku
〃（〃）	降る	furu+ku>fu**ra**ku

助動詞			
つ	（終止）	る（連体）	turu+ku>tu**ra**ku
ぬ	（〃）	る（〃）	nuru+ku>nu**ra**ku
けり	（〃）	る（〃）	keru+ku>ke**ra**ku
しむ	（〃）	しむる（〃）	simuru+ku>simu**ra**ku
む	（〃）	む（〃）	mu+ku>ma**k**u
けむ	（〃）	けむ（〃）	kemu+ku>kema**k**u
ず・ぬ	（〃）	ぬ・（〃）	nu+ku>na**k**u

以上の如く動詞型活用語においては、「く」が付くことにより連体形のウ列音（u）がいづれもア列音（a）に交替したものと見ることができる。

したがつて、「まく」を「まし」の活用形の未然形とする説はいふまでもなく誤である。また、古くは「な・に・ぬ・ね」と活用する否定の助動詞があつたことは確実視されるが、「なく」「なくに」は、連体形「ぬ」に「く」が付くことにより、法則(b)が作用して「なく」となつたことが分る。

法則(b)は接尾辞が付いて派生語を作る場合であるので、接尾語「く」が付いた場合にも法則(b)が作用するかどうかが問題である。しかしながら、「まさる（増）」「わかる（分）」の「る」、「あかす（明）」「くらす（暮）」の「す」が接尾辞であるのに対し、「うたる（打）」「なげかる（嘆）」の「る」、「ゆかす（行）」「のらす（告）」の「す」が助動詞であつても、「る」「す」の直前に同じくア列音（a）が現れることには変りはない。したがつて、この場合、接尾辞と接尾語との相異は、考慮に入れなくてよいと考えられる。もつとも、「る」「す」が付く場合、ア列音（a）とならないで、「くくる（潜）」「しきる（頻）」「よそる（寄）」「わぶる（侘）」「くるほす（狂）」「わしす（走）」「おこす（起）」「つくす（尽）」などのやうに、ウ列音（u）、オ列音（o・ö）となるものがあるが、ア列音（a）になるものが優勢である。そして、既に述べたやうにウ列音（u）・オ列音（o・ö）になるのは、動詞的語根（語幹）に現れてゐる母音の性質と接尾辞「る」「す」の母音uとの音声的関係に基づくものが多いと考へられる。そして動詞型活用語に「く」が付く場合、助動詞

「き」以外は例外なくア列音（a）に付くのは、前にも触れた如く、久語法が動詞的語根（語幹）に現れてゐる母音の性質と接尾辞（又は接尾語）の母音uとの音声的関係よりも、ア列音（a）をとることに絶対的には支配されるやうになつた時代に発生したためではないかと思はれる。接尾辞「る」「す」が動詞的語根（語幹）に付いて派生語を作るのに対し、接尾語「く」は、動詞の連体形を語根（語幹）の位置に立たせたものに付くのみならず、助動詞「つ」「ぬ」（完了）「む」「ぬ（否定）」「けり」等の連体形を語根（語幹）の位置に立たせて付くことは、久語法が接尾辞「る」「す」が付いて派生語を作る造語法よりも後の時代に発生したことを思はしめるのである。すでに述べた如く接尾辞「る」「す」等が付く場合、ア列音（a）の勢力が圧倒的に強くなり、ア列音（a）の類推的勢力により、ア列音（a）化される時代になつて、久語法は発生し、その盛行を見るに至つたものと思はれる。接尾辞「る」「す」が付く場合、後にア列音（a）が圧倒的になり、古形「きこす」「おもほゆ」の他に所形「きかす」「おもはゆ」が生じたことは、有坂博士のお説の通りであらう（「國語音韻史の研究」所收「古代日本語に於ける音節結合の法則」一〇九―一一二頁参照）。

六

したがつて、動詞型の活用語にあつては、「く」はすべて連体形に付いたものであり、連体形がウ列音（u）で終はつてゐるものに付く場合は、前記の（b）により、ウ列音（u）がア列音（a）と交替したのである。そのため、助動詞「き」の連体形「し」に付く場合の外は、連体形であることが見失はれて、久語法の成立に対する考察を混乱に導く結果となつたのである。

したがつて、「あく（aku）のaは連体形の語尾母音の「u」がaと交替することによつてより、現れたもので、「く」は動詞型活用語のすべての連体形に付くといふことができる。

形容詞の活用形に接尾語「く」が付くことについては、本誌第四十八輯においてすでに述べたところである。その際、筆者は「はしけ（甲）」の例に基づいて古代形容詞には連体形が甲類の「け」で終る古形があり、それに「く」が付いたものと説いた。これについては、なほ考慮すべきことがあるが、他日を期したい。しかしながら、「く」「らく」を成立論的に考察すれば、いづれも接尾語「く」が、用言又は動詞型活用語の連体形に付いて生じた形であることは、確かであると思ふ。